
人魚王子

かめれおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚王子

【Nコード】

N1244M

【作者名】

かめれおん

【あらすじ】

よくある異世界ファンタジー。
派遣切りにあい、彼氏に振られた主人公が
事故で気づいたら異世界に。
自分の世界に戻るための冒険が、自分を見つめなおす旅になるお話、
のほです。

人生最悪の日

今日は人生でベスト入りするくらい最悪な日だった。

働いていた会社では派遣切が始まり、見事私は白羽の矢が当たったのだ。

同情的な皆の目が痛い。

大した貯金もなく、大した資格もなく、大した業績もなく、これから、どこに向かっていったら良いのが全くわからなかった。

トイレで少し泣いていこうと休憩中に入ったら噂好きの女子1号2号3号が入ってきていた。

「神崎さん、派遣きりにあつたらしいわよ。」

「えーマジ、可哀想。これからどうするんだろう？」

「まあ派遣だし、大した仕事してなかつたんじゃない？」

お前らより仕事してるわ！と叫びたくなった。

実際、正社員という名の下に、こいつらがどんな仕事してないか私は知っていた。

いや、他の人もしっているんじゃないか？

すると聞きたくない話がまだ続いていた。

「しかもさ、S社の斉藤君に振られたらしいわよ。」

「えーいついつ？」

「聞いた話によると、2週間くらい前。」

正解です。どこで聞いたんだよ！

「うっわーマジ最悪。人生終わってるね。」
「だよー。」

はははと笑ってやつらは去っていった。
涙の代わりに怒りがこみ上げる。

斉藤君には、仕事やめて、結婚しようといわれたが、私は働きたい
といた。

すると、どうせ派遣でしょと軽く笑われ、僕の家事手伝いしてよと
言われた気がした。

そこまで言われてないが、その笑い方がとても気持ちが悪く感じた
のだ。

無理だというと、別れを切り出された。

まあ、お互いもういい年だし彼の言うこともわからなくはない。
でも、無理なものは無理だ。

ずっと、寄り添って他人と生きていくのって奇跡なんじゃないかと
最近思う。

トイレから出て手を洗おうとすると、勢いよく水が飛び出し顔にも
ろにかかった。

「なっ・・・!」

ペーパータオルが備え付けていたのが不幸中の幸いだが
もうどうでも良くなってきた。

この2年こんなことなかったのに。
もう本当に最悪だ。

若干髪の毛や服が濡れていたが、もう帰るだけなので気にせず会社
をでたのだった。

なんだか憂鬱な重い空気が肩にのしかかる。
何かに取り憑かれてるようだ。

ぼーっとしていたら、いつもと違う道を歩いていた。

飲み屋街のそば道は、ご飯の良い香りを漂わせている。

ふと見ると、小さなラーメン屋台のとなりに、おばあさんが小さい机を前に出し

ちよこんと座っていた。

吸い寄せられるように前に立つと、どうぞと丸椅子に座るよう促された。

おばあさんは占いをしているようだった。

「あんだ、そうとう疲れた顔してるね。占うまでもなさそうだけど、どうしたの？」

よっぽどひどい顔をしていたのだろう。

はははとから笑いをすると、次の言葉に詰まった。

「じゃ、この中から一本引いて。」

箸のようなものを一本引いた。おみくじかな？

「あーこれ引いたの。」

箸には何か良くわからない文字が金色で書いている。

「何？」

箸を返しながらきくとおばあさんは困った顔をした。

「これはね、金呪キンジュといって滅多にでないんだけどね。」

「だからなに？」

「わっすれた、ちょっと待って。」

「えー・・・」

ぱらぱらとなにやら古い本をめくりだした。眼鏡を少しずらしてため息をつく。

「七転び八起きっていう感じだね」

「感じて・・・かるっ」

「まあ詳しくいうと、まだ災難続きそうだね。」

「えー・・・」

「大丈夫、最後は良いことあるから。」

はい千円と請求され、しぶしぶ払うとその場を後にした。

いつもと違う道でも、少し遠回りながら帰る事が出来る。

歩道橋をあがって反対側へ行き、地下鉄で帰ることにした。

歩道橋を上がっていくと、そこで酔っ払いどうしがけんかしてる。

（あゝとばっちり受けたくないな。ていうか邪魔！他の人も通りにくくて困ってるし。）

そう思いながら、酔っ払いをよけて端を歩いていたのに

ドンツと一人が勢いよくぶつかってきた。

更にシャツをつかまれ思いつきリスカートの上から腰にしがみ付いてきた。

「うっわっ・・・!!」

歩道橋の手すりにぶつかって、はすが。
あるはずの手すりを体が突き通るようにすり抜け

「う・・・わぁーーーーっ!?!」

私はそのまま道路に落ちていった。

「あーーーー!?!」

「.....あ?」

ヒュウヒュウと風の音が聞こえる。
まだ落下している。

かろっじて眼を開けると 眼下に広がるのは国道23号線ではなく
大海原だった。

「う・・・海ーーーーっ!?!?!?!あーーーーーーーーっ!?!」

ぞあっぼーーーーん

うぼうぼうぼ……

体が深く沈んでいく

そのあとゆっくり浮上していった。

落ちた衝撃で少し意識が飛んだ気がする。

閉じているまぶたに光が透けて見える。

コンタクトをしているのも忘れ、光に誘われ海の中で眼をあけた。

すると 黒い影が光をさえぎり 私の目の前に何かが現れた。

ぎよろつとした黄金色の目と目が合った。

(か・・・怪物ーーーっ うぼうぼうぼ・・・)

海の中で叫んでしまい 思いっきり海水を飲んでしまった

う・・・うぼうぼ

もがけばもがくほど 浮かばなくなった

苦しくて、苦しくて意識が徐々に薄れていった。

天使？

青く青く広がる海

光の柱が降り注ぎ、海の中の生物はまるで踊っているようだ。

いや、実際に踊っていた。

半身魚、半身人の人魚たち。

空になった貝を笛代わりにし海の中の岩場で吹くもの、踊るもの、談笑するもの。

合わせて4人居た。全員女で、談笑している金髪の髪が二人、同じ顔をしていた。

長く豊かな髪が流れに合わせて漂っている。

「そういえば、見た？天使の夢を。」

「ええ、見たわあ。」

ふと音がやむ。

「ライヒット様、コリヤット様、それはどのような意味があるので
すか？」

ブラウンの髪をしていた笛吹きの方がワクワクした目を向けた。

「私も聞きたいわ！」

踊っていた赤茶色の髪の女も笑顔を向けた。

「そうねえ」

「じゃあ」

「「シユタイン王を呼んできて頂戴」」

抜群の掛け合いで最後は二人はもって言った。

「私呼んでくるわ！」

赤茶色の髪の人魚が元気に言った。

「ルーニー、お願い。それとトゥーディはジャカラダを持ってきて頂戴」

「はい！」

のんびりとした声とは裏腹に、二人とも動きは素早かった。

「これから、面白いことが起きそうだわねえ。」

「この海も、地上もね。」

全てを知っているかのように、二人はにこやかに微笑んだ。

「シユタイン様！あれじゃないですか！？」

「何か、落ちてきますよ！」

「よし、言ってみよう。」

ライヤットとコリヤットはこの海でおこることを予言する双子だ。時々どつちがどつちかわからなくなる。

ほくらが目の下にあるほうが、コリヤットだった気がする。

二人はオレを呼んでこう言った。

「今から天使が天から落ちてくる。助けることでこの海は大きな安泰を得られるだろう。」

「しかし天使は海では過ごせぬ。」

「そうねえ、人間に預けてきなさい。」

そういわれ、指定された場所から少し顔をだし空を見ていたら、

少し先の場所で雲をかきわけ、上から人が降ってきていた。勢いよく海に落ちるとそのまま深く沈んでいく。

追いかけて沈んでいく人を見ると、唯の人間の女に見えた。

黒い髪に白い肌、不思議な衣服を見につけている。

落ちた勢いを海が受け止め、やがて女の体は少しずつ浮上してきた。すると、ぴくりと体が動き、うつすら目を開けた。

その瞬間、

「怪物！」

と叫び、もがきたしたが、直に空気を出し切ったのか、また意識を手放していた。

「あゝあ、気を失ってますよ、この天使様」

「お前の目が大きすぎるからだ、ピクター。」

レモンくらいありそうな黄色い大きな目玉を持つ小さな体の魚がシユタインの顔の前をちよろちよろ浮いている。

「私じゃありませんよ、シユタイン様の耳ですよ。ほらこの天使は人間と同じ耳をしています。」

「こいつは人間だろう。なぜ降って来たのかは知らないが・・・。」

シユタインは青緑の目に同じ色をしたギザギザの緑色の耳、青色の揺れる髪

そして半身が魚で尾をなびかせている。

シユタインは落ちてきた女を抱えると浜辺の近くの岩に乗せ 口付けをした。

「ヒューー かつこいい〜！」

「ちがう、ジャカラランダの薬だ。しばらくすれば回復するだろう。」

「そんな貴重な薬を！」

「使わなければ、意味がないだろう。二人にもらったんだ。人間が来た。行くぞ。」

「はいはい。」

ちやぽんという水音とともに二つの影は消えて行った。

夢？

モフモフ、モフモフモフ・・モワン！！モワンモワン！

「モンスーン！どこに行くの！ぬれちゃったら怒られるよ！！」

白い大きな犬は海水を気にも留めず

女の倒れている岩場にかけてつけそのままのぼり顔をぺるぺる舐めていた。

モフモフモフ

金色の髪をなびかせた少年が後から走ってきた。

「うわっ！何！モンスーン！あわわわ、どうしようっとりあえず連れて帰ろう！」

引きずられるように岩場から下ろされ女はそのまま大きい犬の背に、乗せられた。

普段から人を乗せることがあるのか、白い大きな犬は大人しく背中に人を乗せ

少年と一緒に歩き出した。

浜から少し草の生えた土地をぬけて

クリーム色の外壁をした大きなお城の裏門についた少年は小さな扉を開けると

犬と一緒に入っていった。

中に入ると外とは打って変わって

とても手入れの行き届いた庭が広がり 噴水が虹を携えキラキラと輝いていた。

その中で花をつむ人がいる。肩までのストレートで艶やかな茶色い髪を揺らしながら、少年の気配を感じゆつくりと立った。

「ヨウニさま、女の人が海の岩の上で倒れてました！モンスーンが見つけたんです！生きてますよ！」

息を切らしながら 犬を引っ張るように叫ぶ。

ヨウニと呼ばれたものは、犬の背中を見てつぶやいた。

「降臨祭に迷い人ね・・・」

手のうちにあつた花が パラパラと足元に落ち風に吹かれていった。

「アンスリウム、水とぬらした布を持ってきておくれ。」

「はい、ヨウニ様！」

「モンスーン、お前もご苦労だったね。休んでていいよ。」

「モフン！」

返事をしてモンスーンが出て行った。

しばらくするとアンスリウムが水とぬらしたタオルを持ってきてくれた。

「ありがとう。ところで誰かにあつたかい？」

「いいえ。今日は皆町のお祭りに出向いてるのでいません。誰か呼んできましようか？」

「いや・知らないものを城にいられたと知れると、皆を心配させてしまう。皆には内緒にしといてもらえないかな？」

「僕とヨウニさまとの秘密ですね！！わかりました！！」

「あと、モンズーンもね。下がっていいよ、ここは私が見るよ。」

アンスリウムがにこにことお辞儀をして出て行く

私は改めて運ばれてきた女を眺めた。

神々の降臨祭「レイデー」の行われる日に舞い降りたとは・

我々とは違う顔立ち。見たことがない。黒くあまり長くない髪の毛。上着も薄く、下は素足の出る服。

「ふむ・・・かなり軽装なのだな・・。」

布で顔を拭き、擦り傷のあるところにも、水で拭いた跡薬を塗った。

ヨウニは小さな石を取り出し、何か唱えると、

小さな風が巻き起こり風が女の濡れた髪や服を乾かしていった。

口から薬を流そうと軽くあけると、

そこには緑の草が唇の内側について独特のにおいが少ししていた。

「ジャカラントの秘薬・人魚に助けられたのか。面白い・・。」

きらりと光る瞳は冷たい瞳をしていた。

しばらく寝かせておけば直目が覚める。ヨウニは部屋をあとにした。

「・・・・つ 苦あ！！！！」

のどの奥に挟まったように強烈な苦さを出す何かに目を覚ました。

「はあはあ・・・苦っ！何これ！！おえっ。」

近くに、水差しを発見し、あわてて喉に水を流した。

「はあっ・・・まだ苦い・・・どこだここ？」

やっと状況を把握する気になったのか、あたりを見回した。

まだ頭も体もひりひり痛い。

明かりはなく見えにくいが月明かりが壁を移し、すぐに自分の家でないことは確認できた。

「・・・いつたい・・・ここはどこ？」

きしむ体をゆつくり動かしながらベッドを降りる。

「そっいえば・・・歩道橋から落ちて・・・で海に落ちて・・・ん？なんで歩道橋から海？」

とりあえず、傷が手当てされているということは、多分大丈夫だろう。

ここはどこか確かめようと部屋を出た。

静まった廊下はどう見ても病院でもマンションのようになつくりでもない。

古い・・・けど新しい不思議な感覚だ。

廊下には明かりがぼつぼつと灯してある。しかし松明ではない。よく見ると石が火のように発光していた。

「何だ・・・これ？」

石を恐る恐る触ってみる。

「あれ、熱くない。」

ゆらゆらと光が揺れるだけで熱くも痒くもなかった。

ふと、食べ物の良いにおいがして、振り返った。

「それは、刻石こくせきという魔力を持った石ですよ。初めて見られましたか？」

「え・・・あ、はい。あの・・・」

「ここではなんです、起き上がれるのでしたら、食堂のほうで食べながらお話ししましょう。」

一瞬女の人かと思ったが、声が思ったより低かった。

言われるがままについていくと、いくつもの刻石があり、部屋に入ると電球で明るい部屋と変わりない明るさだった。

光沢のある長テーブルがあり、いくつものいすが囲っている。

(これ、金持ちの家だな。明らかに。いや城か・・・)

「こちらにおかけ下さい。」
と椅子を引かれる。

「あ、どうも・・・。」

軽く会釈をして座る。目の前に暖かなスープとパンが置かれた。ぐるぐる・・・とおなががなった。

「ふふふ、元気な証拠ですね。どうぞ、まずはお食事を。」

「・・・頂きます。」

手を合わせて素直に食事を頂くことにした。

なぜなら、これはきつと、夢だからである。だっておかしい。

明らかに外人と思われるこの人と、日本語で喋っている。それにあの光る石。ラピュタじゃないんだから。

「う・・・旨い。」

(超好みの味なんですけど。)

彼は食べ終わるまで、ニコニコしながら待っていた。

「どうぞ、お茶です。」

何かのハーブティのようだ。別に嫌な味じゃない。むしろリラックスできる。

飲み物を飲んで、少し落ち着いていた様子を確認するとヨウニは手を前で組んで女を見た。

「あ、ご紹介がまだでしたね。私はこの館の管理者ヨウニ・バンカールと申します。」

「えと、私は神崎昇かみさきのほる。昇が名前です。」

「ノボル・・・あなたは海辺の岩に倒れていたようですが・・・」

「・・・あなたはどこから来たのですか？海の方このノーウェイから？」

「ノルウェイ？」

「いえ、ノーウェイです。」

「あー違います。日本です。」

「ニホン？聞いたことないな・・・」

おうっと、夢なのに適当にハイっていつとけば良かった。

彼は少し考えてる・・・

よく見ると、いや、さつきも気づいてたけど・・・。

この人超キレイ・・・切れ長の眼に宿る濃いブラウンの瞳、さらさらと流れる髪。

白くてキレイな肌・・・

するとふと眼が合った。

「では、ノボル、あなたは渡航中に船から落ちたとかではないのですね・・・？」

「はい。」

「なぜ、あの場所に？」

「あー・・・私もよくわかりません。」

「記憶がないのですか？」

「あ、そうではなくてですね・・・」

面倒なことになってきた予感。

昇はふうつと息を吐くと、意を決して話始めた。

「たぶんですね。私はこの世界のものではありません。」

「・・・。」

「頭おかしいと思われるかも知れませんが、

私は海にも行っていないし歩道橋という橋の上から落ちたはずなんです。」

「・・・なるほど。」

「ですので、この世界のことは全くわかりません。なぜ、ここに居るのかも、

なぜこうやってヨウニさんと話せるのかもわかりません。」

「では、人魚はご存知ですか？」

おもわず、お茶をこぼしそうになる。

「に、人魚!？」

「おそらく、あなたを岩場まで運んだのは人魚だと思われれます。」

「あー・・・もしかしてあの目の大きい怪物!？」

「いえ・・・それは違うかと。人魚は半身は人です。怪物は何かわかりませんが。」

「あ、そうですか・・・。」

この世界には、魔法の力が宿ってるような刻石というものがあり、人魚まで居るのか。

ますますファンタジーだな・・・。
私、もしかして、事故のショックで植物状態なのかもしれないな。
もう、死んでたりして。
だつて落ちたのは国道23号線。車が通つてないわけがない。
轢かれて引きずられて・・・発見遅く重態・・・みたいな。
しかも！自殺に間違われてるんじゃないの！？
あー最悪だ。

「うーん、ではあなたがあなたの居た世界に帰る方法を聞かなくてはなりませんね。」

「・・・え！？わかるんですか？」

「必ずわかるわけではないのですが・・・、
もしかしたら、あなたのこれからを導いてくれるかもしれません。」
「誰にお聞きすればいいんですか！？」

「今、この辺りは祭りの最中なのですが、神殿の祭長でもあるものが、この世のことをよく見通せるものが居ます。幸い私とは知り合いないので、話を聞いてもらいましょう。」

「ありがとうございます！！本当に、何から何までありがとうございます！！
います！！！」

笑顔のヨウニに昇は椅子から立つて頭を下げた。
もしかしたら、帰ることが出来たら、生き返るかもしれない。
植物状態からの奇跡の生還だ。

「私は祭長に明日連絡し、いつ会えるか聞いてみますね。」
苦笑しながらヨウニは言った。

発見場所

あのあと、部屋に戻った私はまた、お手洗いや洗面所、お風呂の場所と使い方をきいた。

お手洗いは洋式で、刻石で水をキレイにしているそうだ。

洗面所は私のしっているそれと、同じだった。

お風呂はシャワーのついてない洋式って感じた。

そのあと眠り翌朝ヨウニに迎えに来てもらいまた食事をした。

今朝はサラダとスープを食べた。

日本で食べる味とさほど変わらないように思える。

「ノボル、今日私は一緒に案内をすることは出来ませんので、この子に何か気になることがあれば聞いてください。アンスリウム」
食事の片づけをしていた子が、ヨウニの隣に来る。

少しウェーブのかかった淡い金髪に薄いブラウンの大きな瞳。

可愛い女の子のような顔立ちだが、来ている服は男の子のように見える。

「アンスリウムと申します！僕がお世話させていただきます！」

あ、やっぱ男の子だった。

「この子とあそこに寝ている白い犬が、ノボルをここに運んでくれました。」

「え！そうなんだ・・ありがとう。私はノボル。よろしくね、アンスリウム。」

笑顔で返すと、少し赤くなってもじもじしていた。

「よ・・宜しくお願ひします。」

アンスリウムにこの館・・・というより城の中を一通り案内してもらった。

祭りのために人がおらず、今日の夕方に帰ってくるとのこと。刻石を見せてもらったりしながら朝を過ごし、お昼を軽くとった。これから、私が発見された海の岩場まで連れて行ってもらうのだ。

「ところでさ、アンスリウムはいくつ？」

「僕は16歳です！」

「え・・・そ、そうなんだ。」

てつきり小学生くらいかと・・・。

「あ、今もつと幼い子だと思ったでしょう？」

「え・・・っはは、ごめん。」

「いいですけど。」

気さくな性格なのか、

この彼とは案内をしてもらっているうちに、すっかり打ち解けてしまっていた。

「ずっとここで暮らしてるの？」

「・・・僕も、ノボルと同じなんです。」

「へ？」

「僕も、6歳のときにこの海に流れ着いたんです。」

「えー！そっなの！？」

「でも、僕は記憶も一緒に流されてしまったみたいで・・・名前と歳しか覚えてなかったんです。」

それでヨウニさまのところでお世話になってます。」

あのヨウニ様は本当に良い人なんだね・・・。

「際長つていう人には、占ってもらわなかったの？」

「見てもらいました。でも・・・」
「あ・・・ごめん、言いたくなければいいよ。」

少し苦しそうな顔をしたアンスリウムを見て、あわてて言った。
すぐ笑顔にもどるとまた、放し始めた。

「いえ、大丈夫です。私のことは何か霧がかかったようにしか見え
封印がしてあると・・・見るためには鍵が必要だと・・・言われました。」

「かぎ・・・」

「その鍵は、かならずこの海に落ちてくると・・・それで、モンス
ーンの散歩がてら毎日この海を歩いてたんです。そしたら、ノボル
が岩で倒れてるのを見つけました。」
「そっか・・・。」

するとふと足を止めて、私を見た。

「？」

「僕・・・ずっと鍵を探してた。でもそれは物じゃないんじゃない
かと・・・！」

「え？」

「ノボルが鍵じゃないかと思ってます！」

「ええ・・・？ご、ごめん、私何も知らないよ？」

「あ・・・すみません・・・。」

「ううん。もし、私が何か役に立てるなら。何か聞いたら、アンス
リウムにも教えるね。」

「はい！お願いします！！！」

笑顔がまぶしい・・・！

これが女の子で、私が男なら、確実に惚れてまうやるー！である。
しかし・・・この子ももしかしたら、イギリスとかどっかで植物状態
なのではないだろうか・・・

となると、この世界は一体どういった世界なのか？
ますます不思議に首をかしげていた。

「ノボル、ここですよ！この岩です！」
引き潮から元に戻ろうとしている浜辺から、大きな岩が少しだけ海に浸っていた。

「ねえ人魚って見たことある？」

「はい、とても美しいですよ。」

「え、あるの！？」

あっさりと答えられたので、驚いてしまった。

「はい、あまり人間とかかわらないと言われていますが、友好的なものもいて、

船で出かけると声をかけてくれるときがありますよ。どこいくのって。」

「へ〜じゃあ、呼んだら来るかな？」

「呼んでみます？」

どんな青春ドラマだ、と思うが、御礼はいいたかったので叫んでみた。

「助けてくれた人魚さーん！お礼したいから出てきてくださーい！」

「・・・来ませんね。」

う。。はずかしい。

「とにかく、ありがとうー！」

ふいー取り合えず、お礼は言っただぞ。

「あ。そろそろ、夕食のしたくをしないと。」

「え、もう？」

「今日は皆帰ってきたら、宴会が始まるので、お酒やつまみをたんと用意しないとイケないんです」

「へー。祭りって何してるの？祭りのあと宴会って面白いね。」

「祭りは神に感謝する日ですので、3日間にわたり交代で踊り続けるんです。」

「ええっ！」

「町ではもちろんお店などたくさんならば、

踊り子でない人たちは買い物などをして楽しんでますよ。」

「なんか、さらっと言うけど結構大事な祭りじゃないの？」

「そうすると、今年も平和にすごせるんですって。」

「踊る人たちは大変だね。」

「ええ、だから、今日は皆のために僕が用意をするんです。」

「ん？ってことは、この人たちは踊り子なの？」

「そうです。ここは踊り子の人たちが住む場所です。」

でも皆祭りのとき意外はそれぞれの仕事してますけど。」

「ふうん……。なんだか凄いね。」

「ですね。お世話になってる僕に出来るのはこれくらいですから、はりきっちゃうんです。」

ふふふと女の子のように笑うアンスリウムはとても可愛らしかった。

発見場所（後書き）

読みにくくてすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1244m/>

人魚王子

2010年10月20日05時56分発行